

第五章 本朝刊本

先づ五山にて永樂十二年本を、慶長中に至正二十六年本を、寛文中にはゆる増修玉篇を、天保中に宋本を翻刻したるが、この中慶長本のみはその後に數回出板せられたり。

又明治以後黎羅兩氏によりて原本が出板せられたるは既に屢々述べたる所たり。

1 五山板(圖版五の左、九の右、參照)

今前田侯爵家に藏せらる、永樂十二年本の翻刻なること上にも云へるが、五山にての出板年月を詳かにせず。

この本、文字の譌略少からず。覆刻の際に起れるものか、底本既に誤れるかは未だ底本を見ねば定めがたし。例へば

禮字の注 報報祭也

祿字の注 音住注

禍字の注 胡杲果切

皇字の注 主匡也

の類。

川瀬一馬氏は本書について「版式うるはしく且つ初刷に近く朝鮮板としては精刻の部

に属するから、在來五山版と傳へられたのも無理は無いが、其の版式より受ける所謂モヤ／＼とした感じ其の筆劃の不整なる點等一見朝鮮版なる事は疑ひも無い『成簣堂文庫所藏本(祥雲寺舊藏三冊)は稍摺刷年時の遅れた一本で有る』と斷言せられたり(成簣堂善本書目第四篇朝鮮本の第二に此の玉篇を記載)。

氏は又五山版として左の三文庫に藏せらるゝ者を舉げて「双邊有界、十二行、卷一首縦七寸横四寸二分の版式を有し、指南の末に「泰定乙丑良月圓沙書院新槧」の原本記が有り、之を尊經閣文庫所藏の原本本に比較するに稍細部の筆畫に至るまで頗る原刻本の趣を具へて其の直接の覆刻なる事は疑ふ餘地を存しない。而し之が南北朝の頃の覆刊なるは卷中に散見する支那渡來の刻工名に據りて明確にて、永和二年(後龜山の御宇の初刊の集千家註分類社工部詩と同じいから玉篇刊行の年時を推すことが出來よう)。

叡山文庫藏本は第一冊(總目、指南卷一—四)第二冊(卷五—十)第三冊(卷十一—十六)第四冊(卷十七—廿二)で第五冊を缺く。各冊の首に「東山建仁龍藏寮公用也」卷四等の末に「應永_丑霜月 日廣聊置之」の識語が有る。この書は既に餘程の刷摺を重ねた後の本である事は其の版木の磨滅が著しく現れて居て卷三、四には補刻が行はれて居るのに據つても明かで有る。而も本書は應永四年(即ち丁丑)以前の摺刷に係るもので有るから先づ本書刻成の年代を應安永和の間と見れば其の期間僅に二十年に過ぎない。其の間

に於ける此く甚しい版木の磨滅はいかに本書が數多く頻繁に印行せられたかを示すもので有つて其の盛行の狀を察するに餘あるものだ。

石井氏積翠文庫藏本は第四冊目を缺くが毎冊毎に黃龍窟藏の朱印記が有る。即ち建仁寺塔中の舊藏で有るから叡山文庫のも同寺藏だったのと併せ考へて或は其の版木が建仁寺中に有つたかも知れない。本書は叡山文庫本よりも遙に版木の磨滅の度が著しく補刻の枚數も餘程加はつた。

久原文庫藏本は五冊完く補刻の部分は更に加はり寧ろ原刻の部分の殘存せるが僅に散見する程になつてしまつて居る。卷末の反切に關する書入の筆蹟は室町末期のものとして認められるから略其の摺刷の年代を推す事が出來よう。(愼吾云ふ室町將軍は天正元年に廢せられたから永和よりは約二百年。書誌學第壹卷第三號)と述べられたり。

2 慶長九年本(圖版七八の左、十參照)

至正本の覆刻なれども靜嘉堂文庫に存する元本は總目を前にして指南を後にせるに、家藏のこの本はその順序反對なり。

終に鐵山叟宗鈍の識語ありて曰はく

この書はこれ蕭梁の顧野王先生の選べる所爾來支桑卷を藥牆に見るものなり。されども其の板行世に少く童蒙者時々昏迷に苦しむ。故に道本祖轉兩翁心を傾けて以て梓に鏤し正運純孝兩匠力を盡して既に工畢りて諸を京師四條に藏置すといふ。伏して冀はくは庚鹿疑はしき無くして寸陰も耀心の白日に昴め菟菟惑はすして萬年も廓胸の青天を永うせよ。慶長九甲辰夏五月日

鐵山叟宗鈍其の後に漫書す

と。乃ち道本祖轉の兩師が捐資者たるを知れど未だその傳記を知らず。宗鈍の傳は延寶傳燈錄に

京兆の妙心の鐵山宗鈍禪師は窪田氏、甲州上條の人なり。幼より俊敏にして本州の慧林寺に上りて剃髮得度して東谷に駿の清見に師事し、南化興に洛の祥雲に參し、策彥良に天龍に依り、學内外に涉る。後粉邑に旋りて乃ち深山に入り關を閉ぢて禪座し乾梯一裹を携へて九旬の資糧と爲す。時に一僧來りて同じく安居せんと請ふ。師篤信なるを見て之を許し毎日各乾梯一枚を喫し、坐して臥せず工夫して倦まず。僧絡子を乞へば師自ら着る所を以て之に與ふ。期滿ちて山を下りし時僧亦從ひて出でしが中路に至りて忽ち僧の所在を失ふ。師後府の毘沙門堂に詣でしに附せし所の絡子掛かりて像の肩に在りき。永祿の初、東谷妙心に住したれば師從侍參究して遂に悟解あり、谷印記を付す。駿の

臨濟に住せしが天正三年勅ありて妙心に出世せしむ。開堂畢りて闕に詣りて龍顔に謁見す。東照源君幼より師を識り招きて武の平林に住せしむ。住職未だ幾ばくならずして潜に駿府に歸る。慶長三年秋再び妙心に住し大龍院を法山の側に構へて移居老を養ふ。元和三年十月八日化す壽齡八十六。

とあり。この識語は妙心再住の折に成れるなり。佚山が又宋槧の百川學海を藏せしこと訪古志に見ゆれば其の插架の富を知るべく、この翻刻の底本も佚山より出でたるか。正運は其の頃の名刻手たりしなるべく要法寺板論語にも慈眼と兩人ともその名を署せり。

本書は至正本の忠實なる覆刻なれども時には誤訛なき能はず。

示部祭字の注子滯切を了滯切に作る

同 禮 一曰精意云々の一を脱す

土部壺 力竹切土塊を力行切土塊に作る

は其の第一、二卷の初、二葉の内に發見せる所たり。

又著者は成簣堂文庫に就きて此の玉篇を流覽するを得たりし際此の版に兩種あることを認めたり。當時の手記に

甲 高さ六寸九分、濶さ四寸二分 南山書院の書を(圖版十) 王字の注、歸往の往を往に
璵字は忽に従ふ 僅字の注、迷荒に 第二十四部凡の注に古文奇字

乙 高さ六寸八分、濶き四寸二分 南山書院の書を(圖版十) 王字の注、歸往の往を往に

璵字は忽に從ふ、僮字の注、迷義に 第二十四部儿の注に古文音字

と有るもの、以て之を證するに足らん。爾時東道たりしは川瀬氏にて、俱に其の意外なる發見を且つ驚き且つ喜びしは、昭和六年八月初四日にて、山王艸堂綠樹重蔭濃かなる處の此の會心は今猶記憶に新なり。

川瀬氏は更に精細なる研究を發表せられたれば、亦之を引かむ。曰はく、又此の本は其の祖本たる元刊本に比するに、匡郭行間配字、注、双行の小字の筆劃等すべて祖本の趣を存し、木記の部分の如きも、良字の末劃の長く撥ねた様、書字の劃の崩し方などに於て特に原本記を巧に模刻して居る。但し全體として注の小字は細く丸味を帯びた祖本の字體の味はひを相當よく出して居る點が多いが、大字の方は和臭が著く、五山版等に比して祖本たる元刊本の趣を出す點に於て大分闕けて居る。この點からこの版は或は元刊本を一且覆刻したものを更に覆刻した者で無いかとの疑問を生ずるが、現存資料の示す限りに於ては兩本の中間に位すと認められる刻本を見出す事が出来ないから、極めて精巧なる覆刊とは云へないが、直接元刊本に據つたと認むべきもので有る(圖書寮漢籍善本書目にいふ覆元明刊本なる者は、實はこの板を唐紙に摺りて卷末の宗鈍の刊語一葉を存せぬ一本で元刊本と此の板との中間に位すべきもので無い)。

然るに本書の刊語に至るまでを其の儘に覆刻した一本が存在する。匡郭行間配字等より文字の筆劃に至るまで極めて相似し、卷首附卷の部分(即ち玉篇廣韻指南の如きは殊によく覆刻を行つて居る。此の板が前述のに對して其の覆刻と認められる點は字體等に於て前本には猶、元刊本の小字の細い丸味を帯びた趣が多分に窺ひ得たのが、此の板に至つては丸味を失ひ其の筆劃も稍肉太となり著しく和臭が強くなつて居る點で有る。原本記の字體を比較しただけでも、良字、書字等すべて元刊本の字體と離れ、書字の如き一畫少くなり誤刻さへ生じて居る。更に本書が覆刻と認むべき證左は再製によりて多くの誤刻を惹起したる點で有る。(慎吾云ふ圖版十を參照)

元刊本 慶長本 覆刻本

神字の注 引出 引出 引出

同 孔安國 孔安國 孔安國

禪字の注 一曰 曰なし 曰同上

この覆刻本は何時頃出版せられた者で有るか、は明確にしがたいが、其版式等より見ても慶長九年から餘り年時の隔らぬ頃、少くとも元和中か遅くも寛永の初期を下らぬものには相違あるまい。(書誌學第一卷第四號)

3 寛永八年本その前の一種(圖版十一、參照)

卷尾に

寛永八年辛未[季秋吉旦新刊二行

とあるのみにて發行書肆を署せず。

卷一本文第一頁にて高さ七寸五分濶さ五寸三分の廣板にて前本と異なる上に、指南の後に至正云々の木記なし、行數及び一行の字數等は前本と同じ。

大字に音を注文に返り點送り假名を附すること次の寛永廿一年本と大同なれど小異はあり。この小異には善きものと惡しきものとあり

上部上字の注太上大人也

廿一年本は太人と

示部襪字の注居衣切

同 衣の字を

玉部珥字の音ハウ

同 イウに

同 珂字の注白キ如雪

同 白キ如雪に

同 珉字の音ミン

同 コンに訛るはこの本のよき所

示部示字の注確然ト、隤然ト

同 確然ト、隤然トと

同 禮字の注豕祭シノノツリ

同 キノコノマツリと

玉部玉字の注而澤仁也 如隊禮也

同 澤仁也 如隊禮也と

同 瑄字の注獻舜白瑄

同 獻舜白瑄と改むはこの本の惡しき

所

この本にして怪まるゝは卷末の刊行を云へる二行が入木なりと覺しく、上下の横野が他の部分よりもやゝ縮めることなり。此は既に存せし板木につきて此の二行を插みたるか又は改めたるかに解すべきに非ずや。

慶長九年より寛永八年まで廿九年を算へらる。著者はこの間の板行かと思はるるものを睹たればこゝに附記せん。

神宮文庫に存して、その書目に 慶長板玉篇 とあるもの。此の本は慶長本の佚山の跋を補寫したるを附し(川瀬氏は跋文の印刷せられたる本を睹られたりと)たれば此く云はるゝなれど字體瘦勁なる上に板式稍大なれば同板と云ひ難し。即ち慶長本は卷第一初頁の高さ六寸八分濶さ四寸二分弱なるに神宮本は六寸九分と四寸二分三厘となること、卷一一部天字の注仁覆関下の覆、示部禦の大字玉部珥字の注の本作等の字體の異り、璵字の旁を忽に作らず、靈字の下を玉に作れることを擧げなば何人も著者の言を肯はん。成簀堂文庫にも亦一部を藏せらる。

著者の此の見にして幸に許さるとも、神宮本等は八年本が刊記を改めたる以前の物たるを

得ざれば、八年本の祖本たる今一種を得ざるべからず。下に引くべき如く寛永廿一年本に漢玉近代往々雖在之と云へるもの、八年本以前に數種あるをいふにや、二三種の物を所在に見出すをいふにや。

4 寛永二十一年本

卷尾に

寛永廿一年甲申曆林鍾吉辰一行

とあるのみにて發行書肆を署せず。この年は今は正保元年とせらる。この文の前に左の識語あれば

此漢玉近代往々雖在之或點或文字其誤不可勝引今銷謬改字證以令刊正之者也
何人かの訂正を経たるらしきも未だその人を詳にせず。蓋し漢玉とは和玉と相對して慶長九年本の系統なるを斥す名稱たり。

銷謬と云へるもの慶長九年本に珣の字注に許敕切とありしを許救に、玠の字注に四角切とありしを匹角とせる如く(寛永八年本既に然り)膚淺見易きものゝみにて其の他には及ばず。

この本は堅七寸三分横五寸五分の廣板にして八年本よりは丈稍小なり。半面の行數行毎の字詰は全く八年本に同じ。

5 慶安二年本 字集便覽 玉篇奇字早鑑

これに二種あり、一は卷尾の位牌形の墨記に

慶安二曆初春一行 書林余林同梓一行 新開梓上二行の申下に

とあるものにて内閣文庫の所藏、一はこの書林云々の一行が

ぬ屋林傳左衛門

とあるものにて畏友龜田吟風學士の所藏。

大中祥符の牒や序啓より始まることは異ならぬも、本書の特色は其の次に五百四十餘の部首を畫數別にして出して其の各の下に玉篇三十卷に分てる卷數を註したるものすべて六葉あることなり。漢字を畫引にせるは普通、字彙を以て始とし、其の翻刻は寛文の末に有りて慶安二年よりは廿年の後なるが渡來は更に早かるべければ此く見習ひたるならん。その次に指南を出して再び玉篇の總目を出せるが其の板式。

之に附記すべきものに 字集便覽の一書あり。承應二年五月に大和田九左衛門の板行する所。すべて九本より成り、第一本は檢字、第二乃至七本に一畫より七畫までの、第八本に八九畫の、第九本に十畫以上の部首を收む。各字には和訓を附するのみにて漢文の注は全く存せざれば寧ろ和玉篇に屬するに似たれども、その組織は全く漢玉篇たり。然るに寛文三年に至

りて此の字集便覧の各字に玉篇の解を繋げたるもの世に出でたるは別に之を述べん。

その出版は明暦元年なれど、字集便覧と同じく承應二年に成れるに 玉篇奇字早鑑 といふものあり。二年の孟秋に 蒲生末孫松平中書殿掌人奥田嘉心 の編して翌々年の明暦元年仲春に 吉田庄左衛門 の開板。

首に序、次にこの書の用法を説きたる漢文あり。さて奇字早鑑と標して畫に分けて部首字を、背篇と標して玉篇三十卷の順に各部の探り惡き字を、奇字指明と標して齋从示雷従口の類を出し、なほ奇字早鑑終と結び、その後、に神珙九弄圖につきて述べたり。

この書に於て奇なるは一より十までの數字に代ふるに 角徵宮商羽唇舌牙齒喉 の十字を以てせることにて、人^宮とあるは第三卷第一丁の、几^{喉唇}とあるは第十六卷第五丁のことたるなり。

6 慶安四年本

亦二種ありて、一は巻尾に

慶安四辛卯 曆孟春吉日開板

とあり、家藏。一は同所に

慶安四辛卯 年六月吉祥日

とあり、靜嘉堂文庫の所藏。ともに出版書肆を記さぬが全く別種の物たるは孟春本は高さ七寸四分五厘、六月本は七寸四分の異なるにて明かなり。

家藏のは板式寛永本と殆ど同じけれど或は字牀に或は副假名に小異あれば蓋し寛永本を覆刻する際若干の修正を加へたるならん。

7 萬治二年本

これにも二種あり。一は靜嘉堂文庫に藏せられて

萬治二年己亥 八月吉日一行 瀧 庄三郎一行

とあるもの。一は家藏にて

萬治二己亥 九月吉日一行 柳馬場通二條下町一行 吉野屋權兵衛板 一行

とあるもの。家藏のは高さ七寸三分廣さ五寸四分。

8 寛文三年本

美濃半切り本十一冊より成り、第一本は牒、序、啓、玉篇廣韻指南を、第二本は檢字を收め、第三本以下は

第三本 卷第一、二 一、二畫の部首 第八本 卷七 見——里

第四本	卷第三	口——イ	第九本	卷八	金——非
第五本	卷第四	心——犬	第十本	卷九	面——香
第六本	卷第五	玉——立	第十一本	卷十	馬——龠
第七本	卷第六	竹——西			

の諸字を収めたれば全く字彙の順序となり、部内の文字亦字彙によりたれど、各字の注はなほ大廣益會本に依りたれば畢竟大廣益會本を解きて字彙の風に組み換へたるもの。その勞や思ふべきなり。

卷末に

寛文三年癸卯 初夏吉日 寺町誓願寺前 安田十兵衛開板一行
とあり。 龜田學士の所藏

9 寛文四年本

上の寛永本と兩慶安本とは俱に慶長本と同じく元本なるが、此は明藩益王府の増修玉篇の翻刻にて京都の二條通玉屋町村上平樂寺の出版たり。

外題には ^新増修大廣益會玉篇 とあること善本書室藏書志第三章6に引けり云へると同じからず。次に 新刻増修玉篇序(益王一齋の)總目、玉篇廣韻指南を出す。各部の大字の

順序も注も元本と同じく、若し字數多き時は畫別けとなす。往々新增の字ありて黒圈白字にて増修と標して部末もしくは其の畫の末に附す。卷末の亥部の次に 雜字部第五百四十三凡六十九字とあり。

偏旁正俗不同例の卷十、十八、三十卷に在るも元本と同じ。

10 元祿五年本

この書は玉篇の最も備れるものとして明治以前の漢字々書の覇たりしもの、うち見たる所は字彙に手を入れし如くなれど、各字の解は流石に玉篇の舊なること、上の寛文三年本と同じ。題して増續大廣益會玉篇大全といふは寛文三年本よりも玉篇以外の文字を加へたるにて、此等は舊解なきを以て其の本づく所たとへば字彙より引ける字には字彙の解を出せり。而も其の増字は字彙よりも更に多く

心部	三畫總數三十四字(玉篇舊本より増十一字)	字彙總數	廿九字
四畫同	六十九字(同)	廿八字	同
五畫同	八十五字(同)	廿八字	同
五畫同	八十五字(同)	七十五字	
一二畫	舊本 一四四三	増續 一二七二	合 二七〇五

三畫上	同	一六三四	同	一一四五	同	二七七九
同 下	同	一三七九	同	一四七六	同	二八五五
四畫上	同	一九八八	同	一四九二	合	三四八〇
同 下	同	三〇七三	同	二四八二	同	五五五五
五畫	同	二二九六	同	一四〇七	同	三七〇三
六畫上	同	二二四八	同	二〇〇〇	同	四二四八
同 下	同	一八九四	同	一五八一	同	三四七五
七畫	同	二四九五	同	二三〇六	同	四八〇一
八畫	同	一一〇五	同	一〇二五	同	二一三〇
九畫	同	八〇九	同	九八六	同	一七九五
十畫以上	同	一八六四	同	一九七二	同	三八三六

と云へば四一三六二字中一九一四四字即ち四割五分の増加といふべし。

十二卷より成りて首卷には凡例引用書目(百五種)許慎説文と説文解字(必ず説文繫傳ならん)と重出せるも奇に、唐韻、川篇と出せるは親しく其の書を見ぬならん、韻字目録、檢字を出し、第二本以下十一冊は上に引ける畫數別に分てり。

その凡例は畫數を以て分てる玉篇に兩種ありとして、舊本の部を破りて字彙の例を摸した

る者、字彙に出して玉篇に無き字を撮拾して音訓を加へたる者是なり」と云ひ、これらは篇へんに従ひ旁へに従ひて混雜せれば今之を改め且部末に切用の文字を増して此の書を成すと述べ、十一卷を通じて冠解を加へたるに、韻會又は字彙を用ひたるは其の解、詳かにして要を得ればなりとあるにて其の趣を知るべし。この凡例には元祿第四大呂(十二月)と署せるが翌年出版し、享保廿年(四十二年)後、再板、安永九年(又四十四年)三板、天保六年(又四十九年)四板、嘉永七年(又十八年)五板を出せる外、明治に入りても三年、五年、十年、十三年に重板せられ、十六年には銅鑄本さへ出でたる以て其の盛行をトすべし。

毛利香之進名は珊瑚、字は虛白、號は貞齋の撰ぶ所。珀は大阪の人、京都に舌耕して諸書の俚諺抄を著し、字書としても本書の外に字韻早鑑大成、訂補三重韻等あり、その歿年詳かならず。

本書は秋田藩學明德館にて翻刻せられ、その際増補訂正等の事ありしやにも傳ふれど、秋田圖書館の豐澤氏の調査にては單に覆刻に過ぎざるべしとなり。又文化文政の頃の書家西宮奎齋その板下を書きたりとも云へど其の頃の學館の記錄に所見なしとぞ。著者按するに東條耕の諸藩藏版書目は天保迄の物を記せるに亦秋田藩にこの書の事を云はず。聞見に漏れたるか、尙その後の板行なるか。

因に云はん明治に入りて鳳文會玉篇大全とて出でたるも亦この種の物かといふに決して然らず。玉篇の名を襲へる迄にて其の實は全く上述の諸書と無關係の物にて、即ち本書の緒

言に云ひたる如く字書の代名詞として會玉篇の三字を用ひたるものなり。

其の序文には清の黎庶昌が明清諸儒の手録せし音義若干卷を藏せるを請ひて悉く之を收録したれば諸書に載せぬ者多しと誇れど、一の字の解に同也少也皆也、丁の字のに相應聲等を増したるのみ。

鴻齋石川英の編撰鳳文は出版書林の館名、明治十九年の出版。

11 天保五年官板本

吾が昌平學にて澤存堂本を覆刻せるは宋元本の優劣を知りたる結果にして流石は昌平學の着手と首肯せらるゝなり。蓋し五山板が明の泰定本を、慶長板が元の延祐本を、官板が宋本を出せるは奇しき歴史ならずや。

官板なれば板式精明にして出藍の美あるに似たれど小説は免れ難き所、友人濱野穆軒は森立之の手校本を藏せるがすべて廿七條を正せる中今その十三條を出す。

卷上 五三オ 吓を叶に訛る

六七オ 跲の注の跲上也是止の訛り

同 ウ 踏の注の他市切を市に訛る

六九オ 乙呂初は切の訛り

卷中

八三オ 誓の注の説文曰を口と訛る

十五ウ 楠の注の二切を一と訛る

十九ウ 櫛の注の兀層は几の訛り

三〇オ 𦉳の注の胡𦉳切は𦉳の訛り

五八オ 刀の注の俗作刀は刁の訛り

六二オ 鐙の注の秘下銅は秘の訛り

卷下

八オ 煩の注の于煩は干の訛り

卷下

三〇オ 豕の注の走悅也は脱の訛り

七七オ 醯の注の醯は醯の訛り